

講義名	対)特別講義 (プロデュース論)			授業形態	
担当教員	長田 貴仁	開講期・曜日・時間	前期 木曜日 3 時間		
		単位数	2	履修開始年次	2 年生

主題と概要

テレビや雑誌の企画・制作は厳しいプロの現場である。社会動向や流行、視聴者の嗜好を見極めて企画を起し、制作費をスポンサー企業から外部調達する。このようにしてスタートした後は、さらにクライアントなどの人材の能力や特性を見極めて魅力を引き出し、企画内容に合わせて取材をし、素材を編集してクリエイティブとビジネスのバランスを取りながら毎週の番組を達達なく作り上げていく。このすべてのプロセスを担うのがプロデューサーや編集長（編集者）である。

この講義は「明日のテレビを考える会」の協力の下、テレビ局や放送局などの第一線で活躍するゲスト講師が毎回講義を担当してメディアの最前線を感じる社会の動きを、これから社会に第一歩を踏み出す学生向けに語ってもらう。他の講義ではなかなか経験できないユニークな内容となっており、毎年、多くの受講生が履修している。

ゲスト講師の講義を受講する一方で、合わせて下記の教科書を同時並行して自主的に読み進めてもらう（講義中には使わない）。そして、ジャーナリズムとアカデニズムを比較的观点から洞察し、大学でプロデュース、メディアの実態を学ぶ意義について理解を深める。講義と教科書から字づつた結果をまとめた、報告レポートとして執筆、提出することになる。

なお、ゲスト講師からの依頼も踏まえて、毎回、感想、学修成果を小レポートとして提出してもらう。これは出席確認も兼ねる。

到達目標

プロジェクトをマネジメントするとは何かを理解できる。
プロジェクトを成功させる要因について理解できる。
ジャーナリズムとアカデニズムを比較的观点から考察できるようになる。

提出課題

「主題と概要」に書いたとおり、その他については、適宜指示する。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法

「主題と概要」に書いたとおり、その他については、適宜指示する。
講義内で積極的に質問してもらうことを前提としている。恥ずかしいから質問しない、などといった幼稚で甘えた極端な姿勢は、ゲスト講師に対して失礼である。質問に対して、ゲスト講師と長田が即座にフィードバックする。
レポートなど課題については、適宜対応する。

評価の基準

講義関連レポート（50％）、期末レポート（50％）、授業参加度が高い学生は加点する。
本講義では、現代ビジネス社会の評価基準である「信賞必罰」を適用する。
「現代ビジネスの根本」は契約である。履修登録した段階で、以下の契約内容に同意したことになる。良い結果を出した人は高く評価する。本講義開始後に守らない場合は、「契約違反」として処する。
1. 「ネアカ」のりのび「ことたず」の精神を体現し、出席（クラス）のモチベーションを高める前向きな姿勢を見せた人は努力点として加点する。
2. 他の科目と同様、出席は当たり前。無断欠席は大減点。欠席する場合は証明書類（例：公欠届、医師の診断書が病院の領収書写し、など）を提出せよ。
3. 前向きな姿勢を見せ、良い結果を出さなければ出席している意味がない。遅刻、私語など、組織（クラス）を落とす迷惑行為、業務（授業）を妨害する行動、発言については、始末書提出を求める場合がある。その結果しだい、大減点になることを認識し「大人としての行動」を心掛けて欲しい。

履修にあたっての注意・助言他

この講義の目的は、マスコミの仕事やテレビの制作プロセスを理解することだけではない。演説や物作りには拘泥せず仕事を進める思考法を学ぶことになる。これは卒業後に仕事をしていくために必要な能力であるにとどまらず、学内でのアクティブ・ラーニングを始め様々なプロジェクトを進める上でも大きな力となるだろう。
本講義は外部から招聘したゲスト講師が担当することから、来札のない前向きな態度で臨んで欲しい。受講生の態度の良し悪し、積極性の有無が、流通科学大学の学生の評判、ひいては本学のブランドに影響する。ブランド力が下げれば、自身だけでなく他の学生の将来にも悪影響を及ぼすことを自覚しておいて欲しい。受講生一人一人が、「本学の顔」である。

教科書

.ビジネス・ケース・ライティングの方法論的研究	長田貴仁	中央経済社/碩学舎	3000	978-4-502-42281-2
-------------------------	------	-----------	------	-------------------

参考図書

その他

ゲスト講師の著作権に関わるので、以下の点を理解、厳守して欲しい。
1. ゲスト講師が使うスライドは、印刷して配布しない。
2. スマホ他によるスクリーンショットも禁じる。
1. 2. の環境に対応するため、自ら書きとる力、聞き取る力を高めてもらいたい。メモしないうでポーと聞いているだけ、筆記道具、ノートも持参しないという、本学で敗見される大学生としては信じられない姿勢を当たり前前妥と思わないでいただきたい。

授業計画

授業計画は初回の講義で提示する。

授業形態（アクティブ・ラーニング）

ア：PBL（課題解決型学習）	イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
ウ：ディスカッション、ディベート	エ：グループワーク
オ：プレゼンテーション	カ：実習、フィールドワーク
キ：その他（A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）	

履修学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講師については一覽であらかじめ示しているの、良い質問ができるように事前に検索してどのような方が調べておくこと。

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

「創造力（新しい視点と豊かな発想）を持った人材」を育成するため。
「新しい視点と豊かな発想によって、新しい価値を生み出すことができる。」ようにする。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

忙しいゲスト講師に本校に来ていただく対面授業なので、リアルな双方向のやり取りこそが、真の双方向授業であるというスタンス。ケースバイケースで、利便向上のためにICT活用はあり得るが、学生の消極性、発言力強化を助得するよう「悪いICT活用」は敬遠で行わない。
本講義のゲスト講師は、皆、戦場のような厳しい職場で働ってきた猛者ばかり。「人見知りなんです」、「質問するのが恥ずかしい」といった子供の如く（2022年度から18歳以上は成人）甘えたこと言っている学生は、意圖変更の場として本講義を活用してもらいたい。ICTだけに頼ってはいは、皆がICTを活用する時代で勝ち残れない。

実務経験の有無及び活用

実務経験あり。プレジデント社に編集者、記者として勤務し、ビジネス・ジャーナリズムに関する実務経験を積んだ。現在もジャーナリスト、経営評論家として取材し、メディアに発信している。

備考

授業計画は変更される場合がある。